

---

# イタズラな君へ

夕氷嘩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イタズラな君へ

### 【Nコード】

N2999D

### 【作者名】

夕氷嘩

### 【あらすじ】

転校生がやって来た！それは良くも悪くも知りすぎた相手で……！？性別を偽って男性モデルをしている女の子の恋のお話です 前編、後編で完結予定。

## 前編

木の葉もすっかり落ち、吐息も白くなりかけている12月  
：

その噂の人物を目にしたとき、思わず言葉を失った。

「睦月ムツキ誠哉セイヤです。よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる目の前の男子生徒に、外の寒さに同調するかのよう  
に教室内は凍り付いていた。誰も彼に目を釘付けにしたまま、身動き一つすることすら出来な  
い。

は、い？

「……………ち、ちょっと待つて…て、転校生つて、もしかしてあの…  
あなた、あのセイヤなの!!!？」

最前列に座っていた1人の女子生徒が震えた声で尋ねる。  
彼は困つたような顔をして笑った。

「うん、あの『セイヤ』。知つててくれたんだ？」

「……!!!」

その言葉を耳にした瞬間、数人の女子たちが興奮したように悲鳴を  
上げて立ち上がった。教室内が一気にざわめき立つ。

「嘘っつ!!!あのセイヤ!!!??」

「キヤ ツツ！！まじ、ありえないっ！！本物！？」

な、なんですと………？

なんで……、なんでアンタがこんなところにいるのよ！？

顔から眼鏡がズレたことにも気付かず、騒然とする教室の中、ただ一人私は呆然として固まっていた。

知らない人がいるはずがない。

逆に知らないって言うなら、今のご時世周囲の人に軽蔑の目で見られるんじゃないかっていうぐらい。

睦月誠哉 男性ファッション雑誌『アキュートacut<sup>アキュート</sup>e』の専属人気モデル。

テレビにまでは出てこないものの、その顔とスタイルは幅広く知られている有名人。

茶色いクシクシの癖毛風パーマの短い髪は彼にとてもよく似合っていて、シャープな目元が目立つ整った顔立ちには思わずドキリとしてしまう……そんな、日本中の女の子たちを虜トリックにしてしまうような罪な男だ。

確か「抱かれない男ナンバー1」の称号も獲得していたような気がするが…

そ、そんな奴がなんでこんなところにいるのよ…！？

一体、あのバカ社長は何を考えてるわけ！？

私のこと、バレたら困るって言ったのはアンタでしょーが！！

何で誠哉をこんな高校に編入させてるのよ！！？

……そう。突然の話だけど、実は私、コウライハツキ香來葉月はワケあって「ハツキ」という名で「男性モデル」をやっていたりする。

なに、そのマンガみたいな話！？そんなことが現実にあっという間  
け！？とか最初はもちろん思ったけど……。

ワケと言っても別に大した事ではない。

父親の浮気が原因で半年前に両親が離婚し、母親のもとに引き取ら  
れた私は家計を支えるためにアルバイトを探していたところ、従兄  
の勇兄ユウニイに声をかけられた。

『cute』のモデル事務所の社長である勇兄はちょうど男性モ  
デルを探していたらしく、不本意ながら私の容姿は勇兄の出す条件  
に打ってつけだったらしい。(女なのに)

まあ、しょうがないと思う。

背は172センチもあるし、肩幅も広い方だし、髪だってその時は  
短かったから「男」といっても虚しい事に何の違和感もなかったの  
だ。

見間違えられることも多々あったし……。(うう)

でも、男性モデルなんて(いや、確かに稼げるけど)そんな展開ア  
リなのか!?

これがもし勇兄じゃなきゃ間違いなく詐欺だな……

……と私はかなり悩んだが、結局、誘惑に勝てずに勇兄の話をのむ  
ことにした。(それぐらいオイシイ話だった)  
ただし、「期間限定」で。母が働かなくてすむぐらい経済的に余裕  
になるまでだったら、という条件を勇兄が受け入れてくれたのでめ  
でたく交渉成立。

経済的にかなり困った事になっていたので、切羽詰っていた私にと  
ってはとても有難いことだった。

「お前はこれから ハヅキ という名前でモデルをやって貰う。ただし、女っていうだけに危険リスクはかなりあるから、他の奴らには間違っても絶対にバレるなよ。スタツフにも、もちろん他のモデルにもな。まあ、俺も出来るだけフォーローに回るから安心しろ」

ってそう頼もしいお言葉を自信満々に言っていたのは一体どこのどいつでしたっけ!!??

苛々としながら、机の下でぎゅつと拳を握り締める。

誠哉とは当然のことながら、『acute』での仕事仲間だった。何回も一緒に撮ってるし、誠哉は気さくで明るく付き合いやすかったから軽口が叩き合えるぐらいにはそれなりに仲の良い友達の1人だと思う。仕事の悩みだつて何度も相談にのつてもらったし……だけど、もちろん誠哉は私が「女」だなんて微塵も疑っていないわけ。

幸い、今はあの時より髪が伸びてるから仕事はカツラでやってるし、バレない様に学校では眼鏡をかけてるから（我ながら古典的な方法だとは思うが、意外にバレない）極力話しかけないようにすれば、バレーに済むとは思うけど ……

「あーもう！」と髪の毛をむしりたくなる様な衝動が押し寄せてくる。

しよ、しょうがないわ……

こうなっちゃったからにはとりあえず今は他人の振りよ、他人の!! 周りに混ざつて「セイヤくんってカッコいい〜！」とか適当に言つとけばとりあえずは大丈夫よね!?

授業が終わつたら勇兄に電話してどういいうワケかきつちり問い詰め  
てやるんだから!!

「じゃあ、睦月。席は　　そうだなあ…おっ！香來の隣が空いてるな」

なっ、と思わず叫びそうになるのを慌ててこらえた。

女の子達の嫉むようなキツイ視線がひしひしと体に伝わってくる。

ちよ、ちよつと待つてよ！！

何、その展開！？

そんなに人とことん不利な状況に追い詰めて何が楽しいわけ！？  
大体、空いてる席他にもあるじゃない！！あんの禿げオヤジ！！

「せんせえー！何で香來さんの隣なのお！？」

女の子たちも同じ事を思ったようで、ブーイングがあちこちで巻き起こる。

今回ばかりは彼女たちの意見に賛成なので、私も「そうだそうだ」と言わんばかりに大げさに頷いてみせる。

「残ってるの一人席だけだし、隣がいたほうが心細くないんじゃないかと思っただなあー」

だけど、少し髪の毛が寂しくなりかけている担任は全く動じることなくそんな事を呑気にほざいて（何故か）照れたように笑っている。もうこれは完全に自己満足の世界に浸かってるな、このオヤジ……！しかも心細いって小学生じゃないんだからさあ…

ありえない事態に、もう目の前は真っ暗だった。

「名前、なんて言うの？」

誠哉は隣の席につくと、にっこりと笑ってそんなことを尋ねてくる。  
ああ…出たよ、神々スマイル。私も最初、この笑顔にやられたんだ  
よねえ…

今でもうさすがに慣れたけど、免疫のない周りの子達はさっそく被害を受けているようだ。

惚けたように誠哉を見つめている。

…なんて今はそんな事言ってる場合じゃないっ！！

誠哉は催促するように、可愛く首を傾げながら顔を近づけてくる。

いや、ち、近いつて…！！

バカもの！顔を近づけるな、それ以上…！！

なるべく距離をとり渾身の力を振り絞って平常心を保たせると、私はぎこちなく微笑んだ。

「こ、香來デス…！！セイヤくんって思ってたとおりカツコイイネ  
！」

嗚呼、マズい。声が裏返っちゃったじゃない…！！

「カツコイイネ」…って何なのよそのカタコトは…！！

白々しいにも程がある。

あまりの演技力のなさに自分に本気で呆れるわ…

「あはは」と私は冷や汗を背中に大量に流しながら、誤魔化すように笑ってみせた。

「そうか。俺と話してるから緊張して喋り方が変なのか！」とかありえない勘違いしてくれてことを願って。

名前はあえて言わなかった。「葉月」なんてそうある名前じゃないし、万が一ってこともある。

まだ到達目標には全然達していないのだ。今、モデルを辞めさせられたら、またバイト探しから始めなきゃならないことになるし……うわあ、それだけはマジ勘弁したいっ！

ちきしょー！こんな事ならモデル名、もっと別のにして貰えばよかった……！！

ふと違和感を感じて誠哉を見る。

すると、なぜか誠哉は笑いを堪えるようにして口元を覆っていた。

私はぼかんとして、誠哉を見つめる。

……ハ、ハイ？

な、なぜ？やっぱり変なこと言った？

「ふーん。香來さんね……これからよろしく」

誠哉はそう言うのとクスリと笑って微笑んだ。

な、何だあ？

「ねえねえ、誠哉くんって呼んでもいい？私、瑞江ミズエって言うのぉ」

「誠哉くん、私のことユミって呼んでいいからあ」

「アタシは加奈カナ！誠哉くん、生で見るとやっぱ超カッコいいね〜！」

周りの席の女の子達が待ちかねたように、誠哉に話かけ始める。

うわあ……担任ハンゲ完全無視で自己主張大会ね、これじゃあ……。

「趣味は？」「好きな女の子のタイプは？」とありきたりな質問をなぜか男子まで興奮して混ざって聞いているし……

そしてやはりと言うべきなのか……

さすが誠哉。

着実に、そして当たり障りのない程度にスラスラと答えを笑顔で返していく。

「ねえ、もしかして誠哉くんってあの ハヅキ と知り合いだったりする!?!」

「あつ、それ私も聞きたい!」

そんな中、急に出てきた自分の名前に思わず心臓が跳ねる。  
わっ、私!?!

「ああ、ハヅキ?うん、超仲良いけど?」

超仲良いって…そっか、仲良いのか。

誠哉がそう思ってくれていたことが何だか嬉しくて、胸が急にくすぐったくなる。

「きゃああ〜!!やっぱりそうなんだあ!!!」

「ねえねえ、ハヅキってどんな感じなの?」

うわ……誠哉、なんて答えるんだろう?

ドクドクドク……と一気に変な緊張感が押し寄せてきた。

何気ない振りをしながらも、私の耳は完全に誠哉の言葉を待っている。

「ハヅキ……はそうだな。優しいし面白いし、超イイ奴だよ。俺には勿体無いぐらい最高なやつ。友達にしとくのがホントに惜しいぐらい」

誠哉がにっこりと笑ってそう言った。

その言葉が脳に届いた瞬間、胸が暖かいもので満たされていくのが分かった。

どうしよう……

ヤバイ、かなり嬉しいかも……

それからの会話の内容は上の空でまったく覚えていなかった。

## 後編

「ただいま留守にしております。ご用件がありましたら  
プツッ。」

苛立ちをこめてボタンを押し、強制的に耳障りな機械音を遮断する。乱暴に携帯をコートのポケットの中にしまつと、私はぎゅっと寒さで渴<sup>カク</sup>ききつっている唇を噛みしめた。

あーもうっ！あのバカ兄！！

あれから休み時間ごとに何度もしつこいぐらいに勇兄に電話をかけ続けているのに繋がらず、とうとう放課後になってしまったというのに向に電話に出る気配がない。

何かと勘の良い勇兄のことだ。おそらくこうなる事が分かっていて、故意に出ないようにしているに違いないのだが……

だがこれではぼ決定的だった。

勇兄は前々から誠哉が私と同じ学校に転校することを知っていて、私が怒って電話をかけてくることもとつくに予想済みだったのだらう。

一体勇兄も誠哉もどういつつもりなのかは分からないけど……  
敢えて私に知らせずに「いきなり教室でご対面」なんて素晴らしい企画を持ち込んでくれたのだ。

人の今の生活状態を知っていて、まして男装してモデルをするなんてスクープどころじゃないトップブシークレットを危機にさらしてくれちゃって……なんとしてでも誠哉の転校を許した理由を聞かなきゃ気が済まないにきまつてるじゃない！！

木枯らしが容赦なく顔に吹き付けてくる。

冷たい風と道の真ん中でしかめっ面で突っ立っている変な女子高生への不審そうな視線を痛いほど受けながらしばらくどうするべきか逡巡していたが、仕事の時間が来てしまったのでとりあえず事務所向かわざるおえなかった。

しょうがない……

事務所で直接つかまえて聞くしかないか。

私は嘆息すると、コートの中に手を突っ込んで歩き始めた。

\*\*\* \*\*

今日の撮影は「真冬の着まわし2週間スタイル」というテーマらしい。

人気モデルたちの着こなしをチェックするという企画で、ジーンズやアウター、ニットキャップや小物まで様々なものをハイペースで着回していかなければならないという大忙しの撮影の予定だった。

この業界に入るまで、特にファッションにこだわりなんてなかったし（入ってからもあるわけじゃないけど）お金もなかったからあるものを着るっただけで、自分でもとてもじゃないけど今時の女子高生ではなかったと思う。

でもモデルをやるようになって気付いたことがいくつか。中でも感心したのが男性でもここまでオシャレをするんだなっということだ。

変な話、自分の中では「オシャレは女の子がするもの」ってどこか決め付けてるところがあつて、男の人のオシャレっていつでも大した事ないんじゃないかって高をくくっていた。

でも実際は全然そんなことなく、ここの男性モデルの人達はただでさえ顔が綺麗でスタイルもいい人ばかりだけれど、服を身に纏<sup>マ</sup>つたときは一段と輝いていた。

そんな彼らの様子を見て、モデルをやり始めた頃、私はただただぼーっと突っ立って感心してるだけだった。こんなトコで自分はやってけるのかと正直怖気づいたぐらいだ。

まあ、今ようやく慣れ始めたかつてところだけど……

メイクのお姉さんにメイクと髪の毛を整えてもらってから、ふと気が付く。

そういえば今日の撮影の相手誰だっけ？聞かされてないや。

「すみません。今日誰と撮るのかって分かります？」

通りかかった男性のスタッフの人に声をかけると、そのスタッフの人は考えるように首を傾げてから「ああ！」と思い出したように自分の手をぼんと一回叩いた。

「セイヤだよセイヤ！今日はハヅキとセイヤの2人だって聞いているけど」

「げっ！」

スタッフの人の言葉に思わず顔をしかめる。

はあああああああ！？

誠哉と撮影！？しかもふたりだけ！？

神様アンタ一体どういう神経してんのよ！！一回脳みそをかち割って見てやりたいぐらいだわ！！

「げって……ひどいなあハヅキ。そんなに俺のこと嫌い？」

背後から突然かかった声にびくつと肩が震え上がる。

こっ、この声は……

おそろおそろ首だけ後ろに振り向かせると、案の定そこにいたのは噂の人物。今一番顔を合わせたくなかつた相手。

スタイリングされた髪と着こなされた衣装は相変わらず眩しいくらいに格好よくキマっていて、さりげなく首元でちらりと見せているチエーンネックレスも見様によってはエロくすら感じられる。

こっ、このフェロモン男め……

「よ、よお、セイヤ。今日一緒なんだってな」

「くすくす……誰かさんは嫌がつてるみたいだけどね」

笑顔でさらりと言う誠哉が怖い。

この状況をどう打破するべきか悩んでいると、カメラマンから声がかかった。器材の準備が整ったようだ。

な、ナイスタイミング……助かった。

「適当にポーズとってってくれる？どンドン撮ってくから」

カメラマンに言われるがまま好きなようにポーズをとる。

「適当に」という言葉が実は一番困ったりする。

自由なスタイルでいられるから一見楽なように見えるかもしれないけれど、指定されないからかえって自分で角度や表情を変えていかなければならぬのだ。最初にそう言われたときにかなり戸惑った記憶がまだ真新しい。

……その時も確か誠哉との撮影だったんだよね。

色々フォーローしてもらったよなーと笑顔をつくりながらぼんやりと思いつく。

「うん、いいよー！じゃあ、今度はもうちょっと2人も近づいてくれるかい？」

えっ。

カメラマンの言葉に、一瞬表情が固まる。

おいおい、だから何でよりによって今日そついうことすんのよ……

別に正体だってバレてないはずだし、何も焦る事はないんだと心の中では分かっているんだけど、やっぱり今日はあまり誠哉に近づきたくなかった。

躊躇っているときなりグイッと腕を引っ張られる。

気づいた時には誠哉とほとんど体が密着してしまっている状態だった。同時に誠哉の香水の匂いがふわりと鼻を掠める。

「ちよっ……誠哉！近すぎないか!？」

暴れまわる心臓を無理矢理おさえこんで慌てて小声で抗議するが、誠哉はそんな私の様子に構うことなくカメラに向けて微笑みながら、耳元でそつと囁いてきた。

「ほら、早く笑顔つくって。皆ハヅキを待ってる」

「でもっ……」

「いいから、とりあえず笑えって。それとも何？もしかして俺とくつついちゃって緊張してるとか」

「なっ……そんなわけねえだろ！バカなこと言ってるじゃねーよ!」

な、ななななんてことを言うのよ、コイツは!……!

そんなことあるはずないじゃないっ!……!

笑いを含んだ誠哉の声に明らかにからかわれていると分かっているも妙に悔しさが湧いてきて、ムツとしたまま笑顔をつくってカメラの方に顔を向ける。  
なんか上手く誘導されただけな気もするけど……

カメラのシャッターを切る音を聞きながら、合間にちらりと誠哉の顔を見つめてみる。

こんなに至近距離だというのに、なにひとつ落ち度がない。肌だつてきれいだし、高くて筋の通った鼻も切れ長の目も見事なほど整っている完璧な容姿。

こんな顔で愛をささやかれたりしたら、全国のファンの女の子達はそれだけで卒倒しちゃうんじゃないだろうか？

現に傍らで見ているスタッフの人達ですらうつとりした表情を浮かべてこつちを見てるし……

はあ…… ホントに罪な男よね……

そんなことを考えてるうちに、撮影終了の声がかかった。

私はなるべく自然な振る舞いで誠哉から離れると、いつもは誠哉とちよつと話してからスタジオを出るのに、一言も交わさずに私は足早にスタジオを出た。

エレベーターに乗って13階のボタンを押してから、ふうつとため息を吐き出す。

…… 感じ悪いとか思われたらどうか。

でも今誠哉を見ると変に緊張するとか…… 落ち着かなかった。心がざわめいてる感じとか……

はつきり言つて今の状態では誠哉と話するとき平静を装えるか自信がなかった。

チーン、と13階にエレベーターが着いた音が鳴る。

私はエレベーターから降りると、廊下の角の一番端にある部屋のドアに鍵を差し込んで開けてから、中に入った。

この部屋はもとも勇兄が私のために用意してくれたもの。

どこかの高級ホテルの一室のようで風呂もトイレもキッチンも仮眠用の寝室もついているという、このままここで暮らしていけそうな私には勿体無いぐらい贅沢な部屋だ。

それに加えここから見える夜景は絶景で、撮影が夜になるときはいつつも私はぼーっと窓の外の景色を眺めるのが習慣となりつつある。

私はソファアの上に服を脱ぐと、さらしをとり外しにかかった。

所詮Bカップしかない胸だといつても、さらしはやっぱ窮屈で動きにくいから、撮影が終わったらいつつもすぐに外すようにしている。どうせそのまま裏口からすぐに家に帰るから撮影が終われば誰かに会うわけでも見られるわけでもないし……

裏口は勇兄と私ぐらいしか使用してないらしいので、制服のままでも事務所に来れるから便利だった。

さらしを外し終えて、普通のシャツとジーパンを身に着ける。

まだ制服に着替えないのは、もちろん今日の目的を果たすため。勇兄のところに問い詰めにはかなきゃならないから。

勇兄のいわゆる社長室？にあたる場所は、スタッフやモデルが通る廊下を使わないと辿りつけない。

まあ……誰にも会わないと思うけど、さらしを取っちゃったから念の為に一応コートは羽織っていく事にするが……

ったく……ホントに覚えてなさいよ、勇兄め！

面倒なことにしてくれちゃって……

明日からは学校に行けば、誠哉が隣の席にいるのだ。

今でも信じがたいことなのだが……このままではいつボロを出して

しまつか分からない。  
早急になんとかして手を打つしかない。

悶々《モンモン》と悩んでいた思考は、突然部屋の中に響いたノック音で途切れた。

……誰？

体の動きを止めてトントンとノックされ続けている扉を見つめながら、ふと思いだった。

もしかして勇兄……！？

私は「はい」と返事をしながら慌てて扉に駆け寄り、扉を開ける。だが目の前の人物を見た瞬間、思わず呼吸をするのを忘れた。

「邪魔するよ」

瞬き一つせずにぼーっと突っ立っていた私は、その声に慌てて我に返る。

「せせせせ誠哉っ！！！？おまつ……なんでここにいんだよ！？」

「んー？ハツキとちよつと話したいことがあってね」

制止する暇もなく、誠哉は私の横を通り抜けて部屋のなかに入ろうとする。

私は咄嗟にその腕を思いつきり掴んで引き止めた。

「ちよつ……待ってっ！！話があるのは分かったから、1分そこで待ってくれ！！」

ソファーには脱ぎっぱなしのさらしが置かれている。  
何としてでも見られるわけにはいかなかった。

誠哉が頷くのを確認してから、急いで部屋に入ると、ソファーの上に置かれていたさらしをぐるぐるに丸めて、部屋の端においてあった鞆の中突っ込む。

ふうう〜……これでとりあえず何とか……

「へえ……俺のことあんま造りは変わんないんだな」

「!? 誠哉っ……お前っ、なに勝手に入ってきてんだよ!!」

なに考えてんのよこの男は……!  
今1分待てって言ったばかりじゃない!!

誠哉の行動に啞然として固まっていると、誠哉はきよるきよると物珍しそうに部屋を見回したあと、勝手に冷蔵庫を開けてお茶をコップに注いでいる。

誠哉って……こんなに自己中な男だっけ?

なんかもつと気が利いて、思いやりがある優しいナイト的な要素が多分にあった気が……

「誠哉……話ってなんだよ。お前が俺の部屋にくるなんて初めてじゃない?」

誠哉はお茶を飲み干したあと、質問した私の顔をじっと見つめてからふつと笑った。

「……何しにきたと思う?」

「は? だから俺に話があって来たんだろ……って……」

え、ええ？

なんでこっちにだんだん近寄ってくるわけ!?

嫌な予感を抱えながら、反射的に後ろに後ずさる。

一歩間合いを詰められるたびに一歩後ろに下がっていたら、突然「  
どん」と壁に背中が当たった。

壁を背にしてくっついたまま、見たことのない誠哉の真摯な眼差しに冷や汗を感じる。

「お、おい？誠哉、どうしたんだよ…なんでこっちくるんだ？」

「くすくす…そっちこそ何で逃げるの？」

駄目だ……

いつもの誠哉じゃない。目の前の彼はまるで獲物を目の前に舌なめずりしている獣だ。

「おい、本当にどうしたんだよ。なんかいつもの誠哉じゃねーみたいで気持ち悪いぞ？」

はは、と笑ってみせるつもりが緊張のあまり乾いた声しか出てこなかった。

心臓が荒れ狂うように早鐘をうち始める。

ななななんなの!?

なんでこんな事になってるわけ!?!?

パニックに陥った思考に痛撃をくらったのは次の瞬間だった。

「気持ち悪いって…ひどいなあ。昼間はカッコいいって言ってくれ

てたのに」

え？

いま、なん、て言った……？

昼間はカッコいいって言うてくれた、って……

(……………！！！！)

言葉の意味を理解した瞬間、背筋がぴきつと凍りついた。

ま、ままママ、まさか……！！

「ねえ、香來さん？」

余裕な微笑みを浮かべている人物を目の前にして、完全に思考が停止する。

ば、ば、ば、バレてる

！！！！！！

口をぱくぱくと開いたり閉じたりしている私を、誠哉は面白そうにニヤニヤしながら見ていた。

ドス黒そうな笑顔に、彼の人物像が一気にがらりと崩れていく。紳士的で気さくで優しい彼は一体どこへ行っちゃったわけ……？

「な、なんのことだ？ 昼間って……お、俺達会ったの夕方が初めてじゃん」

無駄なあがきだと分かっているにも、自分が女がモデルをやっているなんて認めるわけにはいかなかった。

ここで認めてしまったら、私のモデルとしての人生 いや、むしろ人間としての人生がそこで終わってしまうから。

「じゃあさ」

何を言われるのだろうかとかとビクビクしながら待っていると、いきなり誠哉が私の腕を壁に押さえつけてきた。そのまま体をわずかに曲げて服越しに私の胸に唇で触れてくる。

「この柔らかかそうな胸はなに？」

誠哉の言葉で自分がさらしを付けていなかったことにハッと気が付く。うろたえている私を後目に、さらに誠哉は胸の蕾にくちびるで刺激を与えてくる。

「……………！わ、分かった！分かったから、もうやめて！！」

慌てて自分の胸を誠哉の唇から引き剥がしてから、解放された両腕で胸を覆う。体がヤケに熱かった。

こういうことに慣れてる誠哉にとつたら別に大したことでも何でもないんだろっけど、男性と付き合ったことがあるはずのない私がそんな刺激に耐えられるわけじゃない！！

「……………いつから気付いてたのよ」

恨めしげに誠哉を睨みつけた。ほんの少し、威嚇ってやつだ。だけどそんな私の視線にも憎たらしいほど動じることなく、誠哉は微笑んだまま意地悪い目で私を見つめて言った。

「んー……ヒミツ、かな？」

「……！なっなんで!？」

ヒミツって……意味分らないし!!

なんで隠す必要があるわけ!?

訳が分からないあまり頭の中がこんがらがってくる。

「じゃあそれは言わなくていいから……私が女だって黙っててくれる?」

図々しい頼みだということは百も承知だった。

女のくせに男性モデルを無様にも続けようとしてるなんて都合のいい話があるわけがない。

だけど本当に今モデルを辞めさせられたら困るのだ……

せめてあと、一ヶ月だけでもいい。母だって身を削って働いてくれているというのに、自分が今仕事を手放すわけにはいかなかった。

こんな絶<sup>スガ</sup>りつくような事しか出来ない自分が情けなくて、悔しさのあまり涙が溢れてきそうになる。

「はぁ……ホントに君って子は……」

呆れたような呟きに体がビクリと震えた。どうしよう……やっぱり呆れられたよね?

「……葉月」

名前を呼ばれて俯けていた顔を上げた瞬間、唇にやわらかい温もりが降ってくる。

びっくりして固まっていると、誠哉は何回か唇を味わうようにゆっ

くり触れ合わせてから、そつと唇をはなした。

「クスクス…これを誰かに見られてたら、一見男同士に見えるから疑われちゃうかもね」

「なっとなっとなっ…!?!」

「……好きだよ。葉月」

ふいうちの告白にぎよつとして目を見開く。

い、いま何て……!?!

思いつきり狼狽えている私を見て、誠哉は小さく苦笑した。

「言ったりしないから安心して、葉月が女だつて。そんなの俺だけが知ってればいいし。それにその様子だと……なんで俺がわざわざ転校したかも多分分かってないよね？」

「え、あっ…、そ、そう!私、誠哉の転校のこと勇兄に問いつめようと思つてて」

「社長のことは責めないであげて?ほとんど俺の我が儘だし」

「そ、そうなの?でもじゃあ何で」

転校したの?と言葉を続ける前にふたたびキスで封じ込められてしまつ。

「答える前に 葉月に返事もらつてからね」

「へ、んじ?」

「うん。まさか俺が好きだつて言ったこともう忘れちゃつた?」

捨てられた子犬のようなどこか悲しみが宿った目に、不覚にもキュンと胸が高鳴った。薄茶の無造作な髪が犬の毛のようにすら見えてくる。

「…俺のこと嫌い？」

そんなわけ、ない……………

だってやっと自分の気持ちに気付いちやっただんだから……………

今だって心臓がドキドキして鳴りやまない。

いつから好きになってしまっていたんだろっ？

誠哉の優しさに触れているうちに、こんなにも膨らんでいた思い

…

「…………好き」

恥ずかしくて顔を真っ赤にしたまま消え入りそうな声で言うと、ちやんとその言葉は届いたようで誠哉は嬉しそうに微笑んだ。

「 やっと手に入れた」

抱きしめられた私が聞こえないぐらいに小さく呟かれた言葉。

その時、誠哉がイタズラを初めて成功したときのような子供の笑顔  
を浮かべていたことは私はまだ知る由もない。

\* E N D \*

## 後編（後書き）

ここまでお付き合いして下さって本当にありがとうございます！  
実は初めての完結作品となるのですが……うーん、謎がたくさん  
残ったままになってしまった（笑）勇兄視点と誠哉視点を書こうと  
思っていたのですが、なかなか暇がなくて書けそうにないのでとり  
あえず謎を残したまま完結にすることにしました。もともと息抜き  
程度に書いたものだし、こんな終わりもアリかなと（言い訳で  
す、すみません笑）またもし書ける機会が訪れたら、書こうかな  
とぼちぼち考えてます（\*^\_^\*）では、またどこかでお会  
いできることを願って……ここまで読んで下さった方々、本当にあ  
りがとうございましたv v

番外編・どうしようもなく悩む時もある(前書き)

その後の二人の番外編です。

ずっと以前に書き上がったものなのですが、upするのを忘れてました。(笑)後半糖度高めなので苦手な方はご注意ください。

## 番外編：どうしようもなく悩む時もある

「誠哉くん、一緒にカラオケ行こよ〜」

…五月蠅い。

「ごめんね、俺今日夕方から撮影入ってるんだ」  
「ええ〜っ!? そんなあ」

…そんなあ、じゃないわよ。  
どっからそんな蜂蜜みたいな甘い声が出てくるわけ？

まったく…  
女子トイレでの実態をビデオにでも撮ってアンタ達に見せ付けてやりたいわよ。  
悪口・噂のオンパレードで毒を吐きながらゲラゲラ愉快そうに笑う姿は、とてもじゃないけど今の姿とは似ても似つかない。  
もはやここまでくると、女優か?と言いたくなる。

聞き慣れた会話。  
見慣れた光景。

すでに当たり前前のようになってしまうけど、なかなか慣れそうにない。  
誠哉が転校してきてからもう1カ月経とうとしているのに、未だに実感が湧かないのだ。

私と誠哉の席の周りは、相変わらず歴然とした差で。  
皆飽きることなく毎日のように誠哉の周りに群がっている。

まあ、当たり前と言えば当たり前なんだけど。

『acute』の専属人気モデルをしているだけのことはある端正な顔立ちにスラリとした手足。そこから醸し出される洗練された才一ラ。

見る者を言わずもがな惹きつけてしまう才能は、もはや天性のもの  
としか言いようがない。

奇跡の産物とすら言われてしまう、睦月誠哉むつきせいざという男。

誠哉は仕事が平日と被かぶることが多く学校に来れる時間も限られてしまふ為、誠哉が学校に来るたびに大騒ぎになってしまうのは仕方がないことなのかもしれない。

今日だって確か学校に来るのは1週間ぶりなはずだ。

……そう分かつてはいるんだけど。

ああ…まただ。

つくん、と胸を刺すような痛み。

最近ずっと付き纏っている。

このもやもやとした感情は ……

ぼうつと物思いに耽っていたその時、いきなり《ドンッ》と身体に  
衝撃が走った。

驚いて顔を上げると、クラスの女子たちが怖い顔でこちらを睨んで  
いる。

「ちよつとお、香来さん邪魔！休み時間ぐらいその席からどいて  
よね」

「そうよ、授業中は誠哉君と隣なんてオイシイ思いさせて貰ってん

だから、ちょっとは遠慮しなさいよ」

いやいやいや、こっちだって好きでこの席になったんじゃないから。てか後から来たのは誠哉の方でしょうが!!

なんでもともこの席にいた私が怒られることになるのよ?

自分が攻められることを理不尽に思いつつ、私は黙って席を動くことにした。

休み時間ごとに自分の席を立たなきゃいけないのは非常に面倒くさいが、彼女たちを相手にするのが面倒くさいのもまた事実。

二つを秤にかけたら、どちらをとるかなんて一目瞭然。

厄介ごとなんてゴメンだわ。そんなのこっちから願い下げよ。

だけど、もう一人厄介なヤツがいることを私はすっかり頭の中から抜けていた。

「香来さんが動くことないよ。俺が動けばいいだけの話だから」

なっ……

咄嗟に顔を横に向けると、そこには眩いばかりの善人顔が。

こっちは穩便に物事を進めようっていうのに…

なんでわざわざそんな波風立てるようなこと言つたのよ〜っ!

顔がサアツと蒼ざめていくのが分かる。

予想は見事的中。

誠哉の笑顔にうっとりとしていた女子達だったが、我に返ったように彼の言葉に騒ぎ立て始めた。

「そんな！誠哉君がそんなことする必要まったくないわよお」  
「そうよそうよー！」

あーはいはい。そうですね。

私が動けばいいだけの話なんだから。

「あの…私動くから…」

地味で大人しめな感じの私に相応しく、少しおどおどした感じで席を立ち上がるうとする。

休み時間ぐらい平和に過ごしたいわよ…

苛々した感情を通り越し、すでに半ば諦めの気持ちだった。

しかしそれは右から伸びてきた手にあっさりと阻まれることになる。

「いいから」

手首をしっかりと掴まれ、動こうにも動けない。

予想外の力強さに私の身体は固まってしまっていた。

「誠哉君、そんな女のこと気にすることないってえ」

「うるさい」

「…え？」

女子達の啞然とした表情。

それはもちろん例外なく私も、で。

今の、聞き間違い…？

「ごめん、俺ちょっと疲れちゃったみたい。申し訳ないんだけどしばらくの間1人にして貰ってもいいかな？」

だけどそんな雰囲気など今まで全くなかったかのように、彼は甘い微笑みで一瞬にして打ち消してしまった。

それはさっきの言葉も完全に聞き間違いだと思い込ませるほどの威力で。

女子達も完全にそれにノックアウトされてしまったらしく、ぼつと誠哉に見惚れながら大人しく引き下がっていく。

呆然と彼女達を見送っていると、ぼそつと隣から呟く声が。

「…ごめん、葉月。迷惑かけて。もう少しで怒鳴るところだったよ」

そう苦笑いしながら、誠哉は舌をぺろつと出してみせる。

やっぱりアレは聞き間違いなどではなかったらしい。

前から薄々思ってたけどなかなかの曲者だよね…誠哉も。

今まで怒っている姿なんて見たことないけど、本気で怒る姿はとんでもなく怖いのではないか…なんて密かに思ってしまった。

今日は撮影は入っていなかったので、暇潰しに学校帰りに本屋に立

ち寄ることにした。

一角にあるファッション雑誌のコーナー。

何気なく視線を彷徨わせていると、ふとある一点に目が留まる。

…あ。

そういえば今日発売日だったっけ、最新号『acute』。

「きゃあっ、見て見て 今週この2人が表紙なんだあ」

「嘘っ！セイヤとハヅキじゃない！やだあ、私買っちゃおうかな」

(……………っ！)

一瞬自分の名前が出てきたことにビクリと反応してしまったが、慌てて平常心を取り戻す。

な、なんだ…ビクリしたじゃない…

声の主に目を向けると、そこには女子高生2人組が頬を赤く染めて楽しそうに会話する姿。

そっか…そういえば今月号って誠哉と私が表紙なんだっけ。

この時自分が何を思ってそういう行動に出たのか分からない。

けれど、いつもは自分が出てる雑誌なんて(ましてや自分の男装姿)恥ずかしくて絶対買わなかったのに、なぜか今日は気付いたら買ってしまっていた。

…何やってんだ？私…

呆然としながら、店員から雑誌を受け取る。

すると、先程の女子高生2人が後ろでひそひそと囁く声が聞こえてきた。

「嘘お！あんな地味な感じの子が a c u t e なんて買ってる〜」

「クスクス…ああいう子に限ってセイヤとかハツキの熱烈なファンだったりするのよ、きっと。家になんて大量にポスターが貼ってあったりしてえ」

「……」

うっさいわね…お金払ってんだからいいじゃない。

アンタ達にそんな事言われる筋合どこにもないわよ！

恥ずかしさと怒りで身体が熱くなりそうなのを、何とか堪える。

…今日つてもしかして厄日なわけ？

どうも普段に比べてやっかまれる回数が多い気がする。

彼女達の会話を聞こえなかった振りをして、本屋の外に出たちょうどその時、携帯のバイブが鞆の中で振動したのが分かった。

「…誠哉？」

…今日撮影終わったら、会える？…

私はすぐさま返信することにした。

…会えるよ。どこで待ってればいい？…

「…ふっ」

確か誠哉は夕方から撮影が入ってるって言ってたはずだから、会うのは夜ということになる。

すると1分も経たずして、また携帯が振動した。

「……事務所のいつも、葉月がいる部屋で。撮影が終わり次第すぐに行くから……」

了解……と。

携帯の画面を閉じると、私はさっそくacuteの事務所へと向かうことにした。

どこか嬉しく思ってしまったている自分には気付かない振りをして……だってそんなのって何だか悔しいじゃない。

事務所は相変わらず立派な高層ビルで、都心に堂々と聳え立っていた。いつ見ても感動を覚えてしまうのは、庶民魂？

勇兄がまさかこの社長だなんて今でも信じ難い話なわけで。

立派な入り口を避け、ビルの裏へと回る。

女子高生の姿のままでは不審者とみなされフロントで追い出されるのは目に見えているため、学校帰りにここに寄る時は大抵この裏口を利用してはいる。

あそこの入り口を使えるのは「ハヅキ」使用の時だけだ。

まあ、つまり滅多にないってことなんだけど……

「はあああああ……」

ぼすつと、鞆を放り出してベッドの上に横になる。

ふかふかで気持ちいい……

ホントこの部屋の快適さには毎度毎度癒される。

私の第二の家と言っても決して過言じゃない。

だって寝室もお風呂もキッチンも…ゼーんぶ完備されてるのよ？  
今の我が家の金銭状況からしてみれば、何と贅沢な話なことか。  
だから居心地良くてつついっつい長居しちゃうのよね。

ベッドにうつ伏せになっていた身体を起こすと、携帯で時間を確認する。誠哉が撮影終わるまであと少なくとも1時間はかかりそうだが、1時間：普段学校では真面目そうな生徒の振りをしてるけど、別に暇だからってすぐに机に向かえるほど私は勉強好きな人間ではない。

…テレビでも見てようかな。

そう思い立ち、テレビのリモコンを取ろうとした瞬間、先程恥ずかしい思いをしてまで買ってしまったあの雑誌の存在を思い出した。鞆の中から取り出し、両手で目の前に掲げてみる。表紙に飾られているのは男性2人の写真。

「…。こうして見ると私って本当に男みたいよね」

そうでなきゃ男性ファッション誌のモデルなんて出来ないけど、さ。

最近ふと考えてしまう。

背も高くて、肩幅も広くて、ガサツで、色気の欠片もなくて…  
女としてコレってどうなのかなって。

もちろん女の要素を少しでも出してしまうえば、男性モデルなんて続けていられるわけがないからこのままの状態でいいに越したことはない。

そう頭では納得している。

けど…

誠哉は一体私のどこを好きになつてくれたんだろう？  
全然女らしくなくて可愛げのない私。

撮影でたまに一緒になる女性モデルや女優だけじゃない。  
学校にいるあのうるさいクラスの女子達だつてそうだ。

皆どこかしら特有の「女らしさ」を兼ね揃えている気がする。  
なのに自分について考えてみると、どこにも「女らしさ」というも  
のが見当たらないのだ。

たぶん、最近のもやもやの正体はコレ。

誠哉は鼻肩目なんかなくても本当に格好良くて、クラスどころか学  
校 全国の女性陣を虜にしまっている。

甘めの端正な顔立ちは、誠哉が微笑むだけで卒倒もの。  
まるで物語に出てくるような、正統な王子様。

…そう。

私なんかじゃ誠哉には釣り合わない。

「はーづき」

「っ！？」

いきなり背後からぎゅっと抱きしめられ、一瞬息が止まりそうにな  
る。

慌てて後ろを振り向くと、なぜかそこには嬉しそうな表情を浮かべ  
ている誠哉がいた。

「せ、誠哉！？おまつ…ちよっ…何でこんなところにつ」

撮影はどうしたのよ!?

てか一体どうやって入ってきて…ってそう言えば、あんまりにも誠哉が駄々をこねる子供のようじゃったから観念して、前に合鍵渡しちゃったんだっけ。

動揺が大きかったのか言葉遣いが男使用になっていたことに私は気付かないまま、誠哉に尋ねる。

「葉月に会えると思ったから、死ぬ気で撮影終わらせてきたんだ」

全部一発でOK貰ってきた、なんて悪戯気に舌を出してみせる誠哉に不覚にもときめいてしまったなんて絶対言っちゃらないんだから! そんな尋常じゃない技、アンタにしか出来ないわよ!!

首の周りに絡み付いている腕から逃げようともがいていると、ふと誠哉の視線がある一点で止められたのが分かった。

「あれ…、その雑誌」

「!」

ま、まずい!!

テーブルの上に置きっ放しにしてしまっていた存在に言われてやっとなつていく。

顔にカーツと熱が上っていく。

こんな、自分と誠哉のツーショットが堂々と載っている雑誌をこっそり買っていたなんて、あらぬ誤解を誠哉にされそうで知られたいなかつた。

私の馬鹿ばかつ、何で誘惑に負けて買っちゃってんのよ!

ぐるぐると混乱の渦に巻かれながら、必死に言い訳の言葉を考える。

「ちっ、違つもの。別にこれは…！」  
「ふーん…これは？」

ニヤニヤと意地が悪そうに笑いながら、誠哉は雑誌をひらひらと私に見せるように振ってみせた。  
口を開いたまま言葉を失う。

この男っ…私の反応見て楽しんでる！

「嬉しいな、葉月が俺と写ってる雑誌買ってくれてたなんて。こんなに俺を喜ばせて…どう責任とってくれるつもり？」  
「は？」

誠哉に顔を覗き込まれて思わず赤面する。

なっ、ななな…何を言ってるのコイツは！？

目を僅かに細めて不敵に微笑む姿は、色気と危険な香しか感じない。普段温厚で人当たりの良い誠哉がこんな表情をするのは稀だ。この今の今まで見たことない。

世の中のお嬢様方が目の当たりにしてたら、きっと間違いなく鼻血もんだろう。

これ以上激しくなったら自分は死んでしまつのではないかと危惧してしまつぐらい、心臓がドクドクと早鐘を打っている。

「せっ…、責任ってどういふことよ！？」  
「…コーゆつこと」

いきなり身体と身体が密着するぐらいぎゅっと抱きしめられた。鼻腔を擦るような甘くて爽やかな香で満たされる。

人の身体の温かさに次第に力が抜けていくのが分かった。

……って、ん？

ふと違和感を感じて視線を下に下ろす。

下腹部にあたる、何か熱くて硬いもの。

なんだコレは…

スカート越しに感じて首を捻るが、次の瞬間私は声にならない悲鳴を上げていた。

「ぎゃ

…んう！」

唇を塞がれ、声が吸い込まれる。

誠哉は角度を変えながら唇を押し付けるように何度も触れ合わせると、私の唇をぺろりと舐めてから唇を離れた。

「俺を喜ばせるのも、俺をこんなに欲情させるのも葉月しかない。他の女なんて興味ない。ねえ葉月！俺がどれだけ今まで我慢してきたか葉月は知ってる？」

「しっ、知らないわよ、そんなの！！！」

知るわけじゃないじゃない！

何でこんなところから見てもカッコいい完璧な男が、私みたいな女に…って。誰しもそう思うわよ！

「ねえ、誠哉。なんで私なの？誠哉だったらより取り見取りじゃない。キレイでスタイルが良くて可愛くて…そんな女のひと誠哉の周りにはいっぱいいるのに」

そうよ。

間違ってもこんな、貧相な身体つきの男か女かも分からない、可愛げのない奴なんて…

誠哉にはもつと他にたくさん相応しいひとがいる。

「誠哉もつと欲張っていいと思うよ？私じゃなくてさ…、もつと、誠哉と釣り合う人と」

「葉月？」

…本当は。

誰か他の女の人が誠哉の隣にいるって想像しただけで、ぎゅっと心臓を鷲掴みにされたように胸が苦しくなる。  
ぼろぼろと耐え切れず頬を伝って涙が落ちていく。

あーあ、泣くなんて情けない。

でも私誠哉の事いつのまにかこんなに好きになってたんだなあ…

「バカ葉月」

低く呻くような声と共に、顔を両腕で抱え込むようにして抱きしめられた。

驚いて視線を上げると、そこには怒ったような顔をした誠哉がいた。

「なんで泣くまで我慢してたんだ？ホント馬鹿…」

「ば、馬鹿って…」

こ、こっちは真剣に悩んだのに…

「葉月。俺は葉月のことが好きだよ。決して生半可な気持ちじゃない。葉月がどうしてそこまで自虐的になるのか分からないけど…葉月はとっても可愛いし、俺にとっただらすごく魅力的な女の子

だ。俺は…葉月以外に考えられないのに。葉月が他の男に取られると考えるだけで、相手の男を今すぐ殺したくなる。葉月は平気？俺が他の女のところに行っても何も感じない？」

誠哉が悲しそうに自分を見つめる。

何でそんな、分かりきったこと聞くの？

「…そんなの。平気なわけないでしょ、バカ…」

ホント誠哉の大バカ。

アಂತアの所為で、涙腺がすっかり決壊しちゃったじゃない！

「やっと手に入れたんだ…言っとくけど俺、泣こうが喚こうが葉月を手離す気はまったくくないから」

「っ！」

妖しく微笑まれ、顔が真っ赤になる。

「…って、え！？何やってんの！？」

いつのまにか制服がたくし上げられ、誠哉の手が直接侵入してきて肌に触れている。

私の抵抗を物ともせず、誠哉は嬉しそうに言った。

「せっかく葉月がああ言ってくれたんだ。お言葉に甘えて我慢せず、に欲張らせてもらうことにしたよ。二度とこんな馬鹿なことを葉月が言い出さないように、どうやらちゃんと俺の愛を葉月に伝える必要もあるみたいだし…覚悟してね？」

この後、一体どうなったのかは皆さんのご想像に任せるとしよつ。

自分が悩んでたことが本当に馬鹿馬鹿しくなってしまうぐらい。どうやら私、彼にずっと翻弄されていく運命を背負ってしまったみたいですよ…

\* E N D \*

番外編…どうしようもなく悩む時もある（後書き）

ここまで付き合っただ下さった方々、本当にありがとうございました  
！！…いかがでしたでしょうか？（反応を聞くのが怖い笑）

誠哉の性格が破綻気味になってきた…というか、設定としてはこれが本来の姿というか。今まで猫を被っていたというのが正しいです。  
イメージを壊されたという方がいたら本当にすみません（汗）

この2人は書いて割と勝手に動いてくれるので結構お気に入りの  
2人だったりします。

またいつか番外編とか書けたらいいなあ…

## 映るのは 1 (前書き)

誠哉視点開始です。

葉月視点よりも少し前から話は始まります。

## 映るのは 1

『ハツキ』。

その名前を初めて耳にしたのは。  
都心に堂々と構える立派な事務所の、とある一室であった。

「ハツキ」

無意識のうちにその名を繰り返す。

煙草の煙をふーっとゆっくり吐き出してから、目の前にいる男は「  
そっだ」と頷いた。

若く見えるこの男は、外見通り若い。おそらく20代後半といった  
ところか。

伊瀬勇治<sup>いせゆうじ</sup>。

この若さで「社長」というポジションに就いているというのだから  
驚きである。

だが、流石というべきか。

彼にスカウトされて以来、かれこれ3年以上の付き合いになるが、  
彼の頭の回転の速さと手際の良さには毎回脱帽させられる。

無名の新人が、いつのまにか世界にまで活動の幅を広げる一流モデ  
ルに。

この事務所から何人輩出されたか分からない。

全ては、この目の前にいる男の力。そう言っても決して過言ではな  
いはずだ。

一躍、この事務所が大手として有名になったのは言うまでもない。

「今までモデルなんてやった経験なんて勿論ないから、アイツも最

初は戸惑いだらけだろう。そこで、だ。お前にサポート役を頼もう  
と思つてな。誠哉、お前をここに呼んだわけ」  
「珍しいですね、社長がそんな事頼むなんて…」

少なくとも俺がこの業界に入った時は、ちゃんとしたサポート役が  
付かれた覚えなどない。

そう呟くと「お前はサポート役なんかなくても、勝手に申し上がつ  
てただろ」と呆れたような目を向けられた。

ま、間違いではないけどね…

「いんや、まあ、確かに珍しいかもな…ただアイツの場合事情が事  
情なだけに、必要なんだよ」

「事情…?」

「ま、そこはオフレコで」

ふうん?

意味アリなわけ、ね。

大して興味があるわけじゃないから、深く追求することなく話題を  
変える。

「でもこの時期つてことは…オーディション審査を勝ち抜いたつて  
わけじゃなさそうですね」

「ああ。俺がスカウトした」

ぴくりと、眉が上がる。

少なくとも俺以外に、社長直々にスカウトされたモデルを他に知ら  
なかった。

その事実だけで、自分なんてこの世界に入ってから注目を散々浴びる破目になったというのに。

「明日の午後からお前と一緒に仕事に入って貰う予定になっている。正直お前みたいな忙しい奴に頼むのもどうかと思っただが…他にいなくてな。頼まれてくれるか？」

「社長の頼みとならば断れませんよ。俺で良ければ、引き受けさせて貰います」

笑顔でそう言うと、社長はほっとしたように顔を緩めた。

「そうか…助かるよ。ありがとう」

一礼して、部屋を後にする。

正直面倒くさい、としか思えなかった。

だが社長のあの言葉を聞いてから変わった。

あまり認めたくはないが、どこか楽しみにしている自分がいる。

その事実には驚きつつ、唇の端が僅かに上がる。

ハツキ、ね……

社長にスカウトされたという男……

果たしてどんな奴なのか見物だな。

そんなことをぼんやりと考えながら歩いていると、シャツのポケットに入っていた携帯が振動する。

表示されている名前は、どこで会ったのかも覚えてない、女の名前。

確か同じモデルかなんかだったように思う。

無視していたが、しつこく鳴り続ける携帯に、諦めて通話ボタンを押した。

「…はい、セイヤです」

聞こえてきたのは想像通り。  
耳障りな、甘えたような声。

不快感が出ないように、落ち着いた声で返事を返す。

「…ああ、加奈ちゃんか。え、今日この後？」

…そういえば、最近女ともご無沙汰だったし。  
一日ぐらいならちよつと暇潰しにいいか。  
女を満足させて、後腐れのない関係に持ち込めば言い話。

後から思えば、こんなあからさまな誘いに乗るなんて自分らしくなかったと思うが。

暫く逡巡してから、了承の返事を出す。

電話の向こうで嬉しさに舞い上がる女の声を耳にしながら、頭の中は何故か明日の仕事のことを考えていた。



## 映るのは2

撮影当日

スタジオで自分を出迎えたのは、男のモデルにしては小さく痩せ型の、どちらかと言えば少年のような子だった。

「初めまして。わ…、俺、ハヅキって言います」

伏せがちな目で、少し遠慮したようにそう言う目の前の少年をじっと観察してみる。

…なるほど、ね。

まるで人形のように綺麗に整った顔立ち。スラリと伸びた細く長い手足。

これだけの容貌なら、あの人（社長）が直々にスカウトしたというのも頷ける。

どこか子供っぽさが抜けていないあどけなさも、彼を惹き立てる充分な材料になり得るだろう。

「…初めまして、セイヤです。君の事は話に聞いているよ」

その言葉に、ハヅキは驚いたように「えっ」と顔を上げた。

素直すぎる反応に思わず笑みが零れてしまふ。

今時の子にしては、擦れてない感じにすんなりと好感を持てた。

自分で言うのもなんだけど、俺にしてはかなり珍しいことだと思ふ。

…しかも相手は初対面の子なのに。

「くすくす、そんなに驚かなくてもいいのに…」

「す、すみません…。でも一体どこから…」

「謝る必要はないよ。社長から君のサポートにつくよう頼まれてるんだ。俺で良ければ分からない事があつたら何でも訊いてね」

その答えに納得したのか、「ありがとうございます」とハヅキは頭を下げた。

「君って何歳？」

自分の唐突な質問に、ハヅキは顔を上げてきよとんとこちらを見てきた。

ホント、素直というか何というか…

また笑ってしまいそうになるのを堪えて、返事を待つ。

ハヅキは少し首を傾げてから、おずおずと答えた。

「17ですけど…」

「なんだ、同い年なんだ。ってことは高校2年生？」

「はい」

「じゃあ敬語わざわざ俺に使ってくれる必要はないよ。タメなんだしね」

「でも仮にもセイヤさんは先輩だし…」

どこまでも謙虚な態度を崩そうとしない姿勢に、内心苦笑を漏らす。

「だーめ、禁止だよ。名前も呼び捨てにすること。いいね？言っておくけど、コレ先輩命令だから」

「ええっ！？そんな…」

拒否権も何もないようなもんじゃないか…、そう小さく呟いてハツキは困ったように眉毛を八の字にしている。

けれど自分が譲りそうにないという事に気付いたのか、暫くして、ハツキは諦めたようにため息をついた。

「分かり…分かったよ、セイヤ。これからよろしくな」

「うん、よろしく。じゃあ皆を待たせちゃうとアレだし、そろそろ撮影に入るうか」

そう促すと、緊張で顔が固まってしまったハツキに、笑顔で言う。

「大丈夫。俺も色々助言していくし、誰でも最初の頃は緊張するから。次第に慣れていくよ」

「あ、ああ…だといんだけど。俺まったくモデルやった経験ないからさ…やっぱり緊張してるみたいで」

不安そうに揺れている瞳を見ていたら、気が付いた時には手が伸びてしまっていた。

ぽんぽん、と諭すように頭を優しくたたいてやる。

「傍にいるから」

その言葉にハツとしたようにハツキは顔を上げた。

それから、ぎこちなく、どこか照れ臭そうに彼は微笑んだ。

「さんきゅー、セイヤ。俺頑張るよ」

この時。

胸を撫るような、そんな感覚がふいに自分を襲った。

なんだ…？

内心首を捻りつつ、他のモデル達と共に撮影に入る。

やはり初めての撮影ということもあり、ハツキからどこか緊張した表情がとれることはなかった。

隣でそつと様子を伺いながら、合間を縫って助言をしていく。

自分の助言にひとつひとつ真剣に耳を傾け頷くハツキ…

撮影を無事終えることになって、不思議とその感覚が胸の内から消え去る事はなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2999d/>

---

イタズラな君へ

2010年10月15日02時07分発行